砂沙美と夕闇の男

その日、砂沙美は裏山で魎皇鬼と遊んでいた。
「随分遅くなっちゃったね」
「みゃん」
太陽が傾き、空は黄昏色へと輝いていた。砂沙美は魎皇鬼の手を繋いで歩きながら、今夜の献立を考えていた。阿重霞お姉様は炊飯器のスイッチを入れてくれたかしら。天地兄ちゃんは収穫した野菜を台所に置いておいてくれたかしら。砂沙美は足早になっていた。きっと皆のことだから、何もしていないだろう。全く、我が家は砂沙美がいないと駄目なんだから！と、考えていた時、背後から
「お嬢ちゃん」
呼び止められた。
「お嬢ちゃん、こんな時間からそんなに急いで何処行くんだい？」
振り返ると、声で中年の男性だと分かったが、表情までは分からない。何しろ黄昏刻なのだ。人物の顔は暗くて見えないのだ。
砂沙美は目を細めて相手を見てみたが、それでもやはり表情が掴めず、
「これからおうちへ帰るところなんだけど、おじさん誰？」
と尋ねた。相手の男は低い声で、
「まだおうちへ帰るには早いよ。おじさんと遊ばないかい？」
ふふふと笑いながら砂沙美を誘った。砂沙美の隣で魎皇鬼が砂沙美を守るかの様に唸ったが、砂沙美はそれを制すと
「ごめんなさい、砂沙美達、本当に急いでるの」
踵を返そうとした。だが、男は
「遅くなったら、おじさんが一緒に行って、パパとママに謝ってあげるよ。そうだ、面白い玩具をあげよう」
またも砂沙美を誘ってきた。砂沙美はしつこく誘う男に、半ば呆れていた。
「砂沙美、そんなのいらないよ」
「じゃあ、甘いお菓子をあげよう」
「欲しくないもん」
「素敵なお洋服はどうだい？」
「沢山持っているもの」
「遊園地に連れて行ってあげるよ」
「こんな時間から？もう閉園してるでしょ」
「動物園は？」
「今、行ってもきっと、動物寝てるよ」
「お嬢ちゃんと同じ歳くらいのお友達に会わせてあげるよ」

「そんな子、近所に居るの？」
「格好良い車に乗せてあげよう」
「乗り物酔いが酷いの」

結局、根比べに負けたのは男の方だった。砂沙美は心の中で溜め息を吐いた。
「ええい！じゃあ、御馳走を食べさせてあげよう。ほっぺたが落ちそうなほど、美味しいごはんだ。お嬢ちゃんと、隣に居るお友達もきっと喜ぶ、とびっきりのディナーだよ。どうだい、食べたいだろう」
男は、手を広げ自信満々で、声高らかに言った。その声は、これならば、砂沙美達が付いて行くだろうと信じて疑わない声だった。砂沙美は大袈裟に溜め息を吐くと、
「あのね、おじさん」
と切り出した。
「砂沙美はおうちに帰らなきゃいけないの。うちには阿重霞お姉様、天地兄ちゃんと、美星お姉ちゃん、魎呼お姉ちゃん、鷲羽お姉ちゃんがいるんだけど、阿重霞お姉様はお料理できないし、天地兄ちゃんは気が利きそうで、利かないから食卓の用意をしてくれないの。美星お姉ちゃんは働き者だけど、宇宙規模の天然さんだから何をするか分からないし、魎呼お姉ちゃんに至っては、ご飯より天地兄ちゃんを追いかける事に夢中で、鷲羽お姉ちゃんは料理ができるけれど、一日の大半を研究室で過ごしているから、あてにならないわ。砂沙美はそんな人達のために毎日毎食ごはんを作らないといけないの。だから、今、急いでいるし、おじさんと遊んでいる暇は無いのよ。おじさんが手伝ってくれるなら別だけど、そんなことしてくれないでしょ？兎に角、砂沙美は皆の事で手一杯なの！」
砂沙美が一気に捲し立てると、男は黙ってしまった。どうやら、驚いて絶句しているらしい。じゃあね、と砂沙美が背を向けて魎皇鬼と連れ立って立ち去ろうとすると、
「おい」
男の背後で女の低い声がした。男は振り返り、女の金色に光る瞳と、その姿を見ると
「うわあああああ」
と叫んで逃げ出した。誰もいなかったはずの道から、急に女がぬっと現れたのだ。それも、髪を逆立たせた、金色の瞳の女が。男が逃げるのも当然である。
「何だ、あいつ」
魎呼は腕を組むと、男が逃げて行った方向を睨んだ。
「変なおじさんなの。砂沙美と魎ちゃんに色々してくれるって言ったけど、砂沙美、お夕飯の用意があるから断っちゃった」
「ふーん。世の中、暇な奴がいるんだな」
「ところで魎呼お姉ちゃん何しに来たの？」
砂沙美に尋ねられると、魎呼がよくぞ聞いてくれた！とばかりに

「お前が帰って来ないから、阿重霞の奴が台所に立ってさ、不味い飯はごめんだから、迎えに来たんだよ」
砂沙美に訴えた。砂沙美は甌呼の顔を見上げ、
「そっか！帰ったらすぐに美味しいご飯作るね」
笑顔で頷いた。
三人は、一番星の輝く空の下、家路を辿ったのだった。